

〔研究ノート〕

音節文字の系譜 (2)

—楔形文字における音節文字の形成—

箕原辰夫

1. はじめに

楔形文字、特にメソポタミア文明の初期の王朝であるシュメール (Sumer) 王朝と、それに割り込んで興ったアッカド (Akkad) 王朝において、元々表意文字である楔形文字を音節文字としても表記する方法が確立された。この研究ノートにおいては、この初期の王朝であるシュメール・古アッカドから、新シュメール期 (紀元前 2000 年頃まで) における音節文字の形成についてまとめていく。シュメール・アッカド後に続く、古アッシリア・古バビロニアにおいて、楔形文字は洗練されていくが、基本的には楔形文字の音節文字としての用法については、アッカド朝において確立されたものが踏襲されていくことになる。

英語版の Wikipedia における楔形文字 (cuneiform) の項目には、古アッカド期の固有名詞の表記のために使われたと思われる音節文字が音節表として示されている。その後にアッシリア時代に使われた音節表も表示されている。これは、楔形文字の解読過程とは逆で、最初にヒンクス (Edward Hincks) やローリンソン (Sir Henry Creswicke Rawlinson) がアッシリア期 (紀元前 2000 年以降) のバビロニアの楔形文字を中心に解読し、それ以降、アッシリア期以前の古アッカド期の解読が進んでいった。アッカド期より更に前のシュメール語については、飯島紀が著したシュメール語に関しての一連の解読書を参照する限り、シュメール語自体では、特定の決められた楔形文字を音節文字として表現した例は見当たらない。むしろ、表意文字である楔形文字を音節文字として借用している形での音節文字による表記がなされている。楔形文字の入門書である杉勇の『楔形文字入門』⁽¹⁾や、クリストファー C.B.F ウォーカーの『楔形文字 (大英博物館双書—失われた文字を読む)』⁽²⁾の中にも、楔形文字で音節文字の表記が行なわれた旨の記述があるが、英語版の Wikipedia の「cuneiform」⁽³⁾の項にあるような上記の2つの音節表は掲げられていない。飯島紀のシュメール語に関する書籍類^{(4),(5)}においても、固定の字形を用いた音節表は記されていない。このようなことから、語の固有名詞を特定の音節文字に限って表現し始めたのは、アッカド期からであり、シュメール人の初期王朝までは、特定の文字だけに

(1) 杉勇,『楔形文字入門』,中央公論社,1968年(講談社学術文庫 ISBN:978-4-06-159744-2,2006年)

(2) クリストファー C.B.F ウォーカー,『楔形文字 (大英博物館双書—失われた文字を読む)』,学藝書林, ISBN:978-4875170112,1995年

(3) <https://en.wikipedia.org/wiki/Cuneiform>

(4) 飯島紀,『シュメール人の言語・文化・生活』,泰流社,ISBN:978-4-8121-0158-1,1996年

(5) 飯島紀,『古代メソポタミア語文法—シュメール語読本—』,信山社,ISBN:978-4-7972-8812-4,2011年

限定した音節文字表記を持っていなかったのではないかという仮説を立てることができる。

なお、楔形文字における音節文字の用法では、通常の日本語の「かな」のような、子音と母音の組み合わせ (CV : C が子音 Consonant, V が母音 Vowel) だけでなく、母音の後に子音が来る組み合わせ (VC) も1つの音節文字として捉える。また、子音+母音+子音 (CVC) も1つの音節として捉えて表記されている。もちろん、母音単体 (V) にも音節文字が割り当てられている。たとえば、「a」や「ba」の音を1文字として表わしているが、同様に「ab」や「bak」などの音も1文字で表わされる。なお、母音については後で議論するようにアッカド期に捉えられて記述されているので、A, E, I, U の4音であり、古代エジプト聖刻文字やアラビア文字と同様に O の母音は U に吸収されるものと考えられる。

本稿においては、楔形文字において、王朝の歴史をその使用言語の歴史と共に概観し、その後、メソポタミアの王朝における古文の研究の歴史について記述する。音節文字を基本とするシュメール語が、その後世の時代における古文としての役割を果たしてきたからである。次に、楔形文字の字形の変遷を俯瞰し、シュメール・アッカド期における音節文字、その後の王朝における音節文字の使用法を解説する。なお、以降の記述において、固有名詞について、英語表記とシュメール語、アッカド語で用いている標記が異なるものは、スラッシュで区切って英語表記／シュメール語標記／アッカド語標記の順番でそれぞれを標記することにした (シュメールの時代以降は英語表記／アッカド標記となる)。

2. シュメールから古代ペルシアまでのメソポタミアの使用言語の歴史

2.1. シュメール朝とアッカド朝

メソポタミアの地域では、シュメール朝が最初に興ったが、シュメール王朝とアッカド王朝の時期 (Sumero-Akkadian Period) は、途中からは王朝が混在する形で歴史が進行している。簡単に概要を述べると、ウバイド (Uбайд) 人が棲んでいたイラク南部にシュメール人 (Sumerian speakers) がどこからか現れたのが紀元前 3500 ~ 3100 年の間と言われている。初期シュメールの王朝期 (early dynasty period) においては、最初の王朝がキシシュ (Kish/Kiš/Kiššatu) という都市で紀元前 3000 年頃起ち上がった。その後紀元前 2500 年頃からラガシュ (Lagash/Lagaš) という都市に王朝の中心が移っていくのであるが、イラク北部よりセム系の民族 (ancient Semitic-speaking peoples)⁽⁶⁾ であり、アッカド語 (Akkadian language/Akkadû) の話者であるアッカド人 (Akkadian speakers) が南下してくる (紀元前 2600 年頃よりアッカド人の名前の記述が残っている)。その後アッカド人がキシシュなどのシュメール人の王朝に取り入り、紀元前 2300 年ごろに、サルゴン王 (Sargon/Šar-ru-gi, 古バビロニア語では Sharru kin/Šar-ru-um-ki-in) が、アッカド王朝 (Akkadian Empire) を起ち上げる。アッカド王朝を起ち上げた後も、アッカド人はシュメール人と共棲している。この時期を古アッカド期 (Old Akkadian period) と呼ぶこともある。その後、アッカド朝が紀元前 2200 年頃に東方のザグロス山地の山岳民族であるグティウム族 (Gutians: Gutium 地方に住む民族) から侵入を受けて滅びて、グティウム

(6) https://en.wikipedia.org/wiki/Proto-Semitic_language

朝（Gutian dynasty/gu-ti-um）が興る。この間、南方の都市ラガシュではシュメール人のエンシ（Ensi: 各都市の統治者・知事）であったルーガル・ウシュムガル（Lugal-ushumgal/lugal-ušumgal）がグティウムと和平協約を結び、シュメール文化を担っている。また、紀元前 2120 年南西の都市ウル（Ur/Urim）のウル・ナンム王（Ur-Nammu）によってグティウムは駆逐され、ラガシュも併合され、所謂ウル第 3 王朝（Third dynasty of Ur）が起ち上がる。これはシュメール人による王朝であり、この時期を新シュメール期（Neo-Sumerian Renaissance）と呼ぶが、ウル第 3 王朝の 2 番目の王シュルギ（Shulgi/Šulgi）の後アビシムティ（Abisimti）⁽⁷⁾ がセム族であったことから、アッカド語も第 2 公用語となり、シュメール語とアッカド語の併用が行なわれていた。



図 1 シュメール・アッカド期のメソポタミア中心部⁽⁸⁾

2.2. 古アッシリアと古バビロニア

その後、東方からのエラム人（Elamite/nim-ma）の侵入により、新シュメール王朝も倒れてしまうのであるが、それを奪回した後の紀元前 2000 年以降は、西方からのアムル人（Amorites/mar-tu/Amurrūm）の移住によって、アムル人系の王朝ができていく。短い過渡期のイシン・ラルサ（Isin, Larsa：共に南部の都市名）時代（Isin-Larsa period）

(7) 飯島紀は、シュルギの後としているが、Wikipedia の日本語版では、その子のアマル・シン（Amar Sin）の後とされている。Wikipedia の英語版では、シュルギの最初の後にはマリ市の統治者アピル・キン（Apil-kin）の娘タラム・ウラム（Taram-Uram）とされている。いずれにせよ、アビシムティが宮廷にいた時期においては、大きな権力を握っていたと思われる。アマル・シンから王位を篡奪したシュ・シン（Shu-sin/Šu-Sin）の経緯もあり、近年、アビシムティに関する研究もなされている（Yuhong Wu and Junna Wang, “The Identifications of Šulgi-simti, Wife of Šulgi, with Abi-simti, Mother of Amar-Sin and Šu-Sin, and of Ur-Sin, the Crown Prince, with Amar-Sin,” Journal of Ancient Civilization, Vol.27, 99-130pp, 2012, <http://ihac.nenu.edu.cn/info/1171/1308.htm>）。

(8) 原図は https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ancient_cities_of_Sumer_Akad_and_Elam.jpg より、必要部分をベクトル形式の画像でトレースして作成

を経て、メソポタミアは北部の都市アッシュール (Assur, Ashur/Aššur) を中心とするアッシリア (Assyria/kur ab-šar/mat aš-šur), およびアムル人系の南部の都市バビロン (Babylon) を中心とするバビロニア (Babylonia) に分かれて、お互い干渉しながら発展していく。これらの時代では、アッカド語を受け継ぐ形で各地の方言であるアッシリア語 (Assyrian)・バビロニア語 (Babylonian) が公用語になっていく。アッシリア・バビロニア時代の初期は、古アッシリア・古バビロニア期 (old Assyrian period, old Babylonian period) と呼ばれている。それぞれ、紀元前14世紀・15世紀から、元々小国であったアッシリアは規模を拡大し、逆にバビロニアには北方からのヒッタイト (Hittites) からの侵略の後、紀元前20世紀頃からバビロニアに移り住んできたカッシート (Kassites/Kaššu) 人⁽⁹⁾によって紀元前1595年頃カッシート人のアグム二世 (Agum II/Agum Kakrime) によってカッシート王朝 (Kassite Dynasty: バビロン第3王朝とも呼ばれる) が建てられる。

2.3. 中期アッシリア・中期バビロニア

古アッシリアが衰退し (～紀元前1522年)、一時的にミタンニ・フルリ人 (Mitannian-Hurrian) の支配を受けた (紀元前1422年～紀元前1393年) 後、エリバ・アダトI世 (Eriba-Adad I) がミタンニの支配から脱却し、その子のアッシュール・ウバリトI世 (Ashur uballit I/Aššur-uballit I) がミタンニを打倒したことによって再びアッシリアが拡大を遂げ (紀元前1392年～紀元前1056年)、南部のバビロニアがカッシート人によって運営されていた時期 (紀元前1595年～紀元前1155年) は、それぞれの中期アッシリア・中期バビロニア (middle Assyrian period, middle Babylonian period) あるいはバビロニアにおいてはカッシート期 (Kassite period) と呼ばれている。中期アッシリアにおいては、アッシリア史において数百年ぶりにまとまった記録が残され始め、アッカド語を引き継いだアッカド語の方言であるアッシリア語が公用語として引き続き使われている。一方、カッシート王朝は、古バビロニアのバビロニア語を受け継ぐだけでなく、シュメール文化を復興させ、円筒印章にシュメール語も用いている。中期アッシリア期から、アッシリアは南部のバビロニアに政治介入や侵攻をするが、その結果として、逆にバビロニアの文化をアッシリアに齎した。

(9) ザグロス山脈の辺りから移動してきたのではないかと考えられている。



図2 中期アッシリア・中期バビロニア期のメソポタミア⁽¹⁰⁾

2.4. 新アッシリア（アッシリア帝国）

バビロニアのカッシート王朝は、アッシリアからの侵攻とともに、エラム人からの侵攻を受け、後者を排除するが、紀元前 1000 年頃には非常に小さな王国になる。北部のアッシリアは、その後も拡大を続け、紀元前 900 年頃に南部のバビロニアを併合し、アッシリア帝国（Neo Assyrian Empire：新アッシリア帝国とも呼ばれる）を築きあげる。この時期を新アッシリア期（Neo Assyrian period）と呼ぶ。新アッシリア期でも、アッカド語を受け継ぐアッシリア語が公用語になっているが、シリアに王国を建てたアラム人（Arameans）が用いていたアラム語（Aramaica）も第 2 公用語として使われている。また、古バビロニアの文化も引き継ぎ、シュメール語なども研究されていた。アッシリア帝国の最後の紀元前 668 年から紀元前 630 年頃までの王であったアッシュール・バニパル王（Assurbanipal/Aššur-bāni-apli）によって、シュメール語の文献も含めた古文書が各地から強制的に集められ、図書館が作られている。アッシリア帝国は、300 年以上長く続いたが、アッシュールバニパル王の没後の紀元前 609 年頃までに新バビロニアを含む連合体によって、崩壊させられている。

(10) 原図は、https://en.wikipedia.org/wiki/Assyria#/media/File:Mesopotamia_1200_BC.jpg より切抜き



図3 新アッシリア期のメソポタミア⁽¹¹⁾

2.5. 新バビロニア

バビロニアは、小国となっていたが、アッシリアとの共存・抗争を続けた結果、紀元前625年バビロニア南部に住むカルデア人（Chaldea または Chaldaea：セム系アラム人）であるナボポラッサル（Nabopolassar/Nabû-apla-ušur）によって新バビロニア帝国（Neo-Babylonian Empire）が建てられ、メディア（Medes/Māda）などと上記の連合体を作ってアッシリア滅ぼす。それからの時期を新バビロニア期（Neo-Babylonian period）ある



図4 新バビロニア期のメソポタミア⁽¹²⁾

(11) 原図は、https://en.wikipedia.org/wiki/Assyria#/media/File:Map_of_Assyria.png より切抜き

(12) 原図は、https://en.wikipedia.org/wiki/Babylonia#/media/File:Empire_neo_babylonien.png より切抜き

いはカルデア帝国期（Chaldea empire period）と呼ぶ。新バビロニアは、キュロス2世によって紀元前536年に滅亡するまで約90年間続き、シュメール期やアッカド期の文化は継承されていたが、既にシュメール語やアッカド語は古文の表記として使われていただけで、日常ではアラム語が用いられていた。

2.6. アケメネス・ペルシャ

アケメネス・ペルシャ朝（Achaemenid Persian Empire）は、メディア人（Medes/Medians：ザクロス山脈とその西側および北部イラン高原に紀元前10世紀頃からいたと考えられている民族）とペルシア人（Persians：イラン中央南部ファールス州の古名パールサ：Pârsâ地方に住んでいた民族）の混血であるキュロス2世（古代ペルシャ語ではクルシュ2世：Cyrus II/Kūruš II）によって建てられた。アケメネス・ペルシャにおいては、古代ペルシャ語・アラム語（帝国アラム語：Imperial Aramaic/Official Aramaic）が用いられたが、エラム語やアッカド語の文献も作成されている。この時期における大きな特長として、楔形文字を完全な表音文字（音節文字を含むアルファベット）として古代ペルシア文字を完成させたことが挙げられる。アケメネス・ペルシャ朝は、紀元前330年アレクサンドロス大王（アレクサンドロス3世）の遠征によって滅ぼされるまで約200年間続いた。

西暦	メソポタミア北部	メソポタミア南部
B.C.3000		シュメール シュメール語
B.C.2500		古アッカド・新シュメール アッカド語・シュメール語
B.C.2000	古アッシリア アッシリア語（アッカド語）	古バビロニア バビロニア語（アッカド語）
B.C.1500	中期アッシリア アッシリア語	中期バビロニア（カッシート） バビロニア語
B.C.1000	新アッシリア アッシリア語・国際アラム語	カッシート
B.C.500	新バビロニア アッシリア語・バビロニア語・国際アラム語	
	アケメネス・ペルシャ 古代ペルシャ語・帝国アラム語	

図5 メソポタミアの王朝の変遷と使用言語の年表

3. メソポタミアにおける言語の変遷と古文の研究

3.1. ウバイドからアッカドまで

元々、シュメール人が南イラクに移動してくる前は、ウバイド人が居住しており、シュメール語の中にウバイド期の言葉が表わされている。たとえば、メソポタミアの各都市名やティグルス・ユーフラテス（シュメール語では idigrat と buranun）の2つの河川名は、ウバイド人が付けた名前ではないかと考えられている。シュメール語での命名の在り方と異なるようである。シュメール語自体は、日本語と似た膠着語の性格をもっており、音節文字として言葉を表現する土壌はあった。それに対して、子音中心のセム系（Semitic languages）のアッカド語は、言語構造的にも単語についても、シュメール語とまったく異なっており、途中の古アッカド王朝においても公用語はシュメール語であったので、アッカド人にはかなり習得が難しかったのではなかろうか。実際に、アッカド語で作られた翻訳表（楔形文字とシュメール語の音、該当文字、アッカド語の音の対応が表記されたもので、英語では Syllabary b : 略して S^b と表記されている⁽¹³⁾）は有名である。シュメール語では漢字の音と同様に様々な表意文字が同じ音節の音を表わしている。しかし、そうではないアッカド系の言語（およびアッカド語を受け継ぐアッシリア語・バビロニア語）において固有名詞を記述するために、1つの音節を表わすのに特定の文字を充てたと考えられる。それが更に楔形文字の新字体によって整備されたのは古アッシリア時代・古バビロニア時代以降になってからではないかと考えられている。

3.2. アッシリア・バビロニア期におけるシュメール語

古アッカド期あるいはそれに続く、アッシリア・バビロニア期において、セム系の言語を話すアッカド・アッシリア民族は、元はまったく違うシュメール民族の言葉用の表記システムとしての楔形文字を借用しているが、特にアッシリア時代においては、シュメールの黄金期からも500～1000年以上経過しているのであるから、20世紀～21世紀に生きる我々が11～16世紀以前の文を古文として読むものと同様に、シュメールの文書は、その時代において既に古文として扱われていたと考えられている。もちろん、後に述べる楔形文字の字形自体の変遷もあり、整備されたアッシリア文字・バビロニア文字によって、シュメール時代の古文が新字体によって転記されてもいる。

3.3. 新アッシリア・新バビロニア期におけるシュメール語

有名なニネヴェ（Nineveh/Ninua）のクユンジク（Kuyunjik）にある楔形文字の図書館を興したアッシリアのアッシュールバニパル王（Ashurbanipal/Aššur-bāni-apli または Aššur-bāni-habal : 紀元前669～627年在位）の時代においては、シュメール時代の古文書は既に1800年も前のものになっていた。それ以前に古文書が集められていたアッシュールの図書館は、アッシリアの中興の英主と呼ばれているティグラト・ピレセル1世（Tiglath Pileser I/Tukultī-apil-Ešarra : 紀元前1113～1074年在位）の建立したものと考えられて

(13) Syllabary a～cについては、杉勇『楔形文字入門』, pp.170-180を参照

いるが、それでも当時にして1300～1400年も前の古文書ということになる。字形の変遷があるものの古アッカド期からの楔形文字の踏襲という利点があるが、アッシリア・バビロニア時代中期・後期において、まったく系統の異なるシュメール語の解説は大変ではなかったかと思われる。杉勇の『楔形文字入門』では、アッシュールバニパル王の言葉として「我は透かし見ることのできない掛け算や割り算の問題を解いた。我はアカド語を覆い隠している、上達に困難なシュメール語の精妙な文書を読めるし、まったく謎めいた大洪水以前の石刻文の原文がわかる。」⁽¹⁴⁾という記述があるが、シュメール時代の古い知識や文学の継承が、神官・書記官あるいは学者などを通じて中期アッシリア時代まで連綿と続いていたことがわかる。

アッシリアは、中期アッシリアの紀元前1000年頃からアッカド語以外にセム系のアラム語（Lingua Aramaica）を外交用の国際語として採用しており、バビロニアも新バビロニア期（紀元前625～536年）には、アラム語が公用語になっている。アッシュールバニパル王の時代には、大方アラム語も標準になっていたことを考えると、アッシリア語の祖である古アッカド語や、系統のまったく異なるシュメール語に造詣が深い王は、かなりの知識人であったことが窺える。

3.4. 表意文字と音節文字の関係

楔形文字は、多価（polyvalent）の文字で、1つの文字が語を表わす表語文字（logogram）と音を表わす音節文字（syllabogram）の両方の用途で用いられている⁽¹⁵⁾。これは、エジプト聖刻文字や中国漢字、あるいはマヤ文字でも同じ状況であり、古代の文字に共通の性質であると思われる（エジプト聖刻文字の場合は表音文字が音素文字になっているという例外がある）。また、初期に使われたシュメール語と後世まで続いていくアッカド語の関係は、漢字と日本語の仮名の関係に似ている。しかし、シュメール語自体では、特定の音節文字を規定して、表音文字としての文字表があるわけではなく、地名や神名、人名などの固有名詞をシュメール語の表意文字が持つ音節を利用して表記していたに過ぎない。これは、漢字において許真の『説文解字』の六書の分類でいうところの「仮借」に値する。これに対して、アッカド以降における表音文字は、特定の文字を「仮名」として定義している。状況が大きく異なるのは、漢字に対して日本語が音節を中心とする言語であったのに対して、元のシュメール語自体は音節中心の発音体系を持つが、楔形文字を借用したアッカド語はセム系で子音中心の発音体系を持つという逆転現象になっているところである。そのため、セム系の言語では一般に子音中心の表音文字表記体系（アブジャド：Abjad と呼ばれる）を持つ（古代エジプト聖刻文字や原カナン・フェニキア文字、ナバティア文字、アラム文字、ヘブライ文字、アラビア文字等）のに対して、アッカド語、アッシリア語、バビロニア語だけは、「音節文字」で自分たちの言語の音を表わすことになった。なお、アッカド語を介して伝わっているシュメール語の音の体系は、セム系言語のアッカド語の影響を受けて、元のシュメール語の音の体系から変容している可能性が高い。これについては、

(14) 杉勇『楔形文字入門』, pp.151

(15) Niek Veldhuijs, "Chapter 4 Levels of literacy," in "The Oxford handbook of Cuneiform Culture," editor Karen Radner and Eleanor Robson, Oxford University press, 2011, ISBN 978-0-19-955730-1, p.68.

後段で議論の紹介をする。

4. 楔形文字の字形の変遷

4.1. 原エラム文字

メソポタミアの東方にザクロス山脈の麓に紀元前 8000 年の頃からエラム人が棲んでおり、スサ (Susa) などの都市の古層 (スサ第 3 古層) などから、紀元前 3000 年頃の前エラム文字 (Proto-Elamite script : エラム線文字 : Linear Elamite と呼ばれる)⁽¹⁶⁾で記述された粘土板のタブレットが 1600 枚以上見つかった。これらに書かれている文字は、象形文字と数字であるとされ、メソポタミアの原楔形文字からの借用もあるので、記述された内容が解読されている。また、前エラム文字についてはインダス文字との類似性が指摘されている。エラム線文字は、前エラム文字から派生した音節文字であるが、紀元前 2250 年～紀元前 2220 年頃に使われていたことがわかっている⁽¹⁷⁾。



図6 前エラム文字の例⁽¹⁸⁾

4.2. ウルク古拙文字

メソポタミアでの楔形文字としての原形は、古都ウルクの古層 (第 4b 古層) から出土した約 680 通の文書の粘土板のタブレット (ウルク文書と呼ばれる、そしてこれらの楔形文字の字形全体を指してウルク古拙文字 : Uruk archaic script と呼ばれる) で、紀元 3200 年～紀元 3100 年頃、ウバイド人の棲む地にシュメール人が入植してきた頃のものとしてされている。ウルク文字は、象形文字であり、前エラム文字と似ている。ウルク文書は、その後 5000 枚のタブレットにまで及び、ファルケンシュタイン (Adam Falkenstein : アッシリア学者)⁽¹⁹⁾ 以来のベルリン自由大学のエングルンド (Robert K. Englund : アッシリア学者、1996 年～2018 年は、UCLA 所属)⁽²⁰⁾によって解析されている。

(16) <https://en.wikipedia.org/wiki/Proto-Elamite>

(17) <https://ja.wikipedia.org/wiki/エラム語>, https://en.wikipedia.org/wiki/Linear_Elamite

(18) 原図は、https://en.wikipedia.org/wiki/Proto-Elamite#/media/File:Proto-Elamite_tablet_with_transcription.jpg より、解釈図を横方向に並べた

(19) Adam Falkenstein, *Archaische Texte aus Uruk (ATU)*, ADFU, Leipzig/Berlin, 5 volumes, 1936.

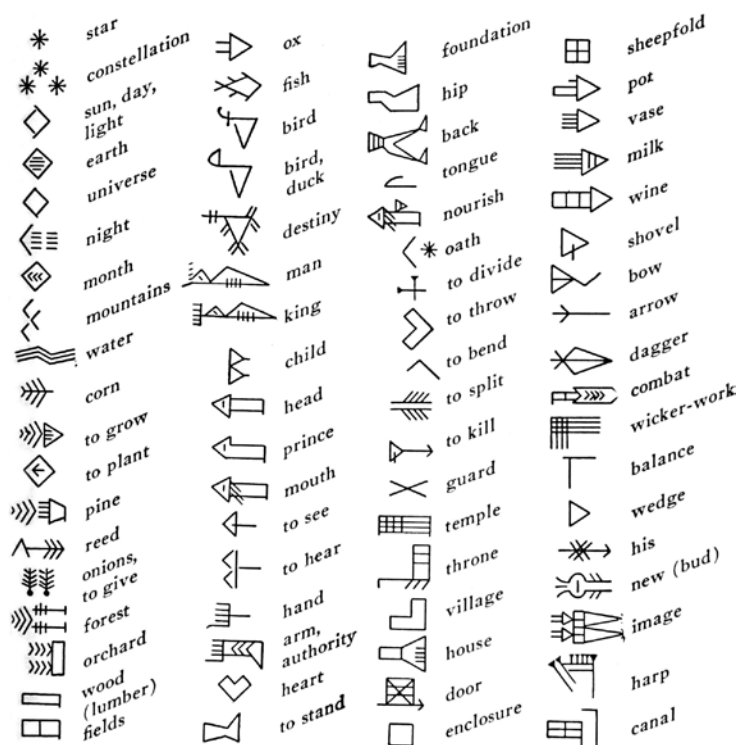


図7 ウルク古拙文字の例⁽²¹⁾

4.3. ジェムデト・ナスル期の線文字

紀元前 3100 年～紀元前 2900 年の間は、ジェムデト・ナスル期（Jemdet-Nasr）と呼ばれている⁽²²⁾。この時代の文字は、文字が線状（線文字：Linear script と呼ばれる）になり、シュメール語で解読し得る文字も多くなった。特に、縦に描くと長くなる文字もあったため、この時期の文字は、90 度回転して横に描かれるようになっている。また、固有名詞に音節文字が使われ始めている。ウルク古拙文字とジェムデト・ナスル期の線文字、および次の古拙文字までの期間は、原文字期（Proto-literate period）と呼ばれているが、この時期までの文字の使われ方は、備忘のためのメモや物名・人名表、収支計算表、賃貸・売買文などの記すに留まっていた。ジェムデト・ナスルは、キシユの近くの小廃丘であるが 1926 年にオックスフォード大学の調査隊が 150 ～ 180 個のタブレットを発見している。

(20) Robert K. Englund, "Texts from the Late Uruk Period," Mesopotamien: Späturuk-Zeit und Frühdynastische Zeit, Orbis Biblicus et Orientalis. Fribourg et Göttingen: Universitätsverlag Freiburg Schweiz and Vandenhoeck and Ruprecht, pp. 15-233, 1998.

(21) 原図は、[https://en.wikipedia.org/wiki/Cuneiform#/media/File:Cuneiform_pictographic_signs_\(vertical\).jpg](https://en.wikipedia.org/wiki/Cuneiform#/media/File:Cuneiform_pictographic_signs_(vertical).jpg)

(22) 黒田和彦, 「楔形文字」, 『オリエント史講座 1 オリエント世界の誕生』, 學生社, pp.76-98, 1976.



図8 ジュムデト・ナスル期の線文字の例⁽²³⁾

4.4. 古拙楔形文字

古拙楔形文字 (Archaic cuneiform) とは、紀元前 2800 年～紀元前 2500 年の時期に使われた文字のことを指し、古拙文字が使われた時期は、楔形文字の原形が形成される時期と考えられている。古拙楔形文字は、別の場所で発見された 2 つの主要な文書で使われている。1 つは、ウル (Ur) 市の王墓 (紀元前 2600 年頃のウル第 1 王朝のもの) から、1926 年以降発見された約 400 通のタブレットであり、これらの文書はウル古風文書と呼ばれている。書体的には、次のシュルパック文書よりは丸みを帯びているため、過渡期のものであったとされている。

もう 1 つは、1902 年以降にドイツ・オリエント学会がニップル (Nippur/Nibru/Nibbur) 市の南のシュルパック (Shuruppak/Šuruppak) において発見された 87 通のタブレットに書かれた文書であり、これはシュルパック文書と呼ばれている。紀元前 2600 年～紀元前 2500 年頃のものとしてされている。このシュルパック文書に書かれている文字は、ウル古風文書やそれ以前の文字と較べると直線と四角張った形になっており、楔形文字の原形のような形になっている。また、シュメール語における音節文字も日本語における漢字仮名混淆文のように多く使われるようになった。ただし、原文字期の文書であり、完全な文章として記述されるには至らなかった。

(23) 原図は、https://en.wikipedia.org/wiki/Cuneiform#/media/File:Cuneiform_tablet-administrative_account_of_barley_distribution_with_cylinder_seal_impression_of_a_male_figure_hunting_dogs_and_boars_MET-DT847.jpg



図9 ウル古風文書の古拙楔形文字の例⁽²⁴⁾

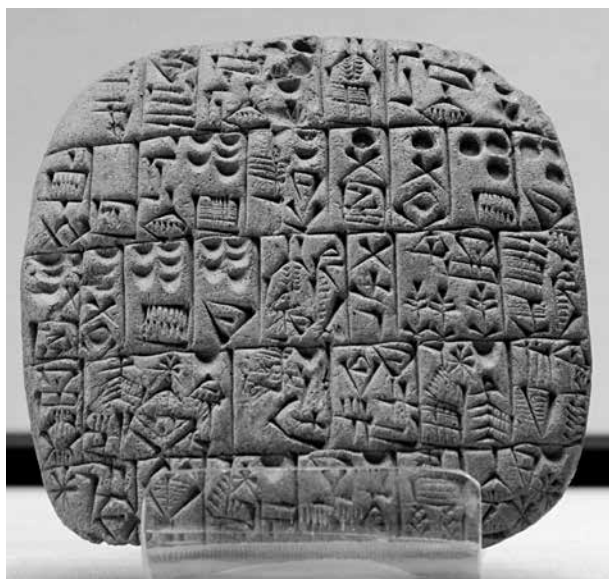


図10 シュルパック文書の古拙楔形文字の例⁽²⁵⁾

(24) https://en.wikipedia.org/wiki/Cuneiform#/media/File:Sumerian_26th_c_Adab.jpg

(25) https://en.wikipedia.org/wiki/Cuneiform#/media/File:Sales_contract_Shuruppak_Louvre_AO3766.jpg

4.5. シュメールの初期王朝の楔形文字

初期王朝の楔形文字 (Early dynastic cuneiform/Classic cuneiform) は、紀元 2500 年～紀元 2300 年の時期に形成されている。この頃より、碑文以外の一般の文書では、葦の先を尖らせたペンの形が固定され、それを正方形の粘土板のタブレットに押し当てて、1つの楔形文字を記述する方法が採られている。タブレットの表面と裏面の両方が用いられている。また、1つの楔形文字は、原文字期の象形文字を再現していたので、これより後期の楔形文字よりは画数が多いものとなっている。文書としては、紀元前 2500 年頃のラガシュ市のウル・ナンシュ (Ur-Nanshe/Ur-Nanše) 王の碑文から始まり、それ以降ラガシュに君臨したアクルガル (Akurgal) 王～ルガルアンダ (Lugal-anda) 王、紀元 2300 年頃のウルカギナ (Uru-ka-gina, Uru-inim-gina, または Iri-ka-gina) 王までの記録が残されており、記念物的な内容の煉瓦や建築物の由来を記した煉瓦などの他に、経済関係のことを記した粘土板が多く、当時の様子を知ることができる。音節文字による表音化は、この時期にも進んだようである⁽²⁶⁾。図は、左からウルナンシュ、アクルガル、ウルカギナ王の記録のタブレットである。

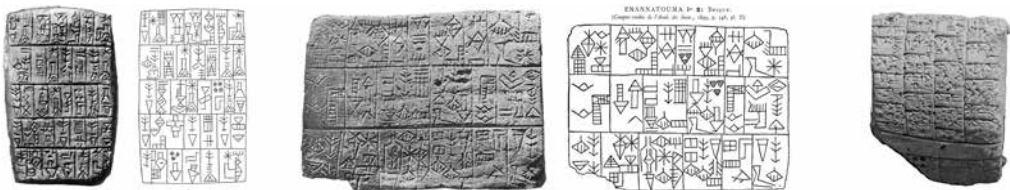


図 11 初期王朝の楔形文字の例⁽²⁷⁾

4.6. アッカド期の楔形文字

アッカド期の楔形文字 (Sumero-Akkadian cuneiform) は、紀元前 2300 年～紀元前 2100 年の時期に形成されたと考えられている。この頃の楔形文字は、現在頻繁に目にする通常の楔形文字の字体になっている。また、記録される粘土板には長方形のものも現れてくるが、表面は平らで裏面が凸状で丸みを帯びているのが特徴になっている。ただし、新シュメールのウル第3王朝のタブレットの中には、両面とも丸みを帯びものも現れる。またこの頃は、四隅の丸みがなくなって角張ってくるのも特徴になっている。文字の種類は、アッカド語による表音化 (音節文字化) が進み、600 種類程度に減少している。図はシュルギ王の円筒印章である。

(26) シュメール文字, 世界の文字, http://www.chikyukotobamura.org/muse/wr_middleeast_18.html

(27) https://en.wikipedia.org/wiki/Ur-Nanshe#/media/File:Tablet_of_Ur-Nanshe.jpg, https://en.wikipedia.org/wiki/Akurgal#/media/File:Tablet_of_Enannatum_son_of_Akurgal.jpg, [https://en.wikipedia.org/wiki/Urukagina#/media/File:Cone_fragment_inscribed_with_part_of_the_text_of_the_reforms_of_Uruinimgina_\(Urukagina\)_-_Oriental_Institute_Museum,_University_of_Chicago_-_DSC06974.JPG](https://en.wikipedia.org/wiki/Urukagina#/media/File:Cone_fragment_inscribed_with_part_of_the_text_of_the_reforms_of_Uruinimgina_(Urukagina)_-_Oriental_Institute_Museum,_University_of_Chicago_-_DSC06974.JPG)



図 12 アッカド期の楔形文字の例⁽²⁸⁾

4.7. アッシリア期・バビロニア期の楔形文字

アッシリア・バビロニアの楔形文字（Assyrian/Babylonian cuneiform）については、古アッシリア・古バビロニアの最初から、古代ペルシャによって滅ぼされる、紀元前 2000 年～紀元前 300 年までの長い期間なので、この期間の間に楔形文字についても様々な変革がなされている。バビロニアでは、図で示したような古バビロニアで制定されたハンムラビ法典（Code of Hammurabi）で使われた端正な字形が古バビロニア文字として区別されることもある。



図 13 古バビロニア期の楔形文字の例⁽²⁹⁾

また、アッシリアについてもアッカド語の継承に留まっていた古アッシリアの時代と、中期アッシリアの時代の楔形文字も区別される。図は、カルム・カネシュ（Karum Kanesh）で見つかった 20,000 個のタブレットの中で、アッシリアのイトゥリリ（Itur-ili）からカルム・カネシュのエナム・アシュル（Ennam-Ashur）に充てた手紙の一部である。

(28) https://en.wikipedia.org/wiki/Third_Dynasty_of_Ur#/media/File:Cylinder_seal_of_Shulgi.jpg

(29) [https://en.wikipedia.org/wiki/Code_of_Hammurabi#/media/File:CH_165_\(horizontal\).jpg](https://en.wikipedia.org/wiki/Code_of_Hammurabi#/media/File:CH_165_(horizontal).jpg)



図14 アッシリア期の楔形文字の例⁽³⁰⁾

4.8. 新アッシリア・新バビロニア期の楔形文字

その後のアッシリア帝国（新アッシリア）の時代の文字は、新アッシリア文字として楔形文字の正字体（標準文字）とされている。新アッシリア文字にまでになると、初期王朝時代・アッカド時代と較べて、かなり画数が省略されている。また、楔形文字の楔の方向は、8方向あるが、この時代になると時計の7時～12時までの4方向と、平仮名の「く」のような合成形とあわせて、5種類の楔の合成の形に単純化されてしまっている。図は、ニネヴェの北の王宮でラッサム（Hormuzd Rassam）によって1854年に発掘されたラッサム・シリンドラー（Rassam Cylinder）とその写しの一部である。ちなみに、Unicodeの規格では本稿を記述している2020年現在、シュメール・アッカド期の楔形文字の字体については定義されているが、新アッシリア期の正字体としての楔形文字の字体は定義されていない。

新バビロニア期における楔形文字についても、新アッシリアの楔形文字の画数省略を受け継ぎ、比較的読みやすい端正な文字になっている。

下図にいくつかの文字について、ウルク古拙文字の象形文字から、アッシリア・バビロニアの楔形文字（後期楔形文字）までの変遷の過程について記す。

(30) 原図は、https://en.wikipedia.org/wiki/Old_Assyrian_Empire#/media/File:Itur-ili_-_Business_Letter_-_Walters_481462_-_View_A.jpg より切抜き

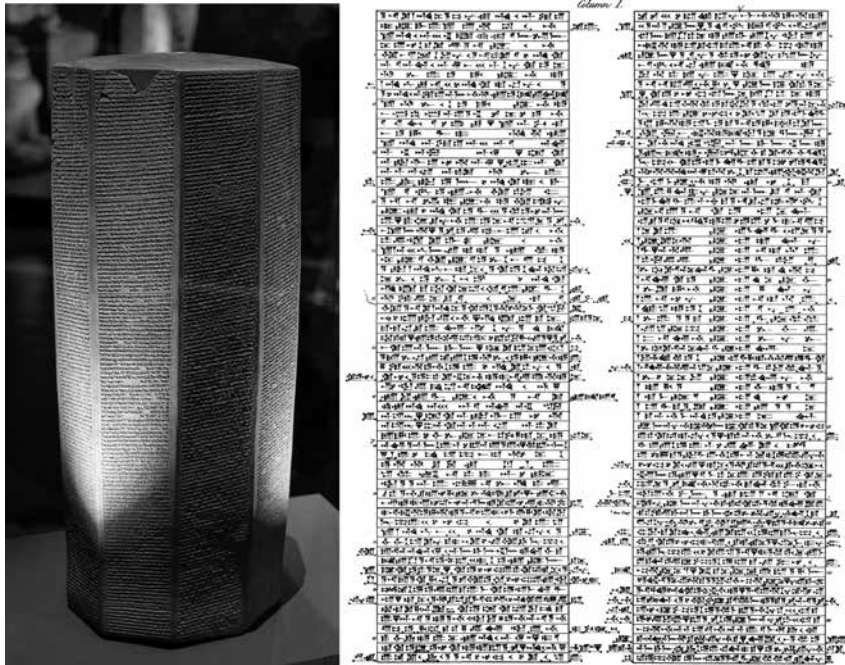


図 15 新アッシリアの楔形文字の例⁽³¹⁾



図 16 新バビロニア期のバビロニアの楔形文字の例⁽³²⁾

(31) 原図は、https://en.wikipedia.org/wiki/Rassam_cylinder#/media/File:Rassam_Prism_of_Ashurbanipal_10-sided_prism_Nineveh_643_BCE.jpg および [https://en.wikipedia.org/wiki/Rassam_cylinder#/media/File:Rassam_cylinder\(transcription_of_the_first_column\).jpg](https://en.wikipedia.org/wiki/Rassam_cylinder#/media/File:Rassam_cylinder(transcription_of_the_first_column).jpg) より切抜き、合成

(32) 原図は、https://en.wikipedia.org/wiki/Akkadian_language#/media/File:Inscription_in_Babylonian_in_the_Xerxes_I_inscription_at_Van_5th_century_BCE.jpg より切抜き

TABLE ILLUSTRATING THE SIMPLIFICATION
OF CUNEIFORM SIGNS.









































	STAR	HEAD OF A MAN	EAR OF WHEAT	MAN (with his crown)	CIRCLE. SUN	RAIN	HOUSE	DRINKING POT	REED	FISH
LINE CHARACTER.										
OLD BABYLONIAN.										
ASSYRIAN.										
NEW BABYLONIAN.										

図17 楔形文字の変遷例⁽³³⁾

4.8. 波及した楔形文字 (Derived cuneiform)

楔形文字で記述された言語は、その他にヒッタイト語 (Hittite)、ミタンニ (Mitanni) およびフルリ (Hurrian) 語、ウラルトゥ (Urartu/Ararat) 語などがあるが、文字の形を変えて波及した文字としては、ウガリット文字・エラム文字・古代ペルシア文字が挙げられる。

ウガリット (Ugarit) 文字は、シリア地方のシャムラという都市で紀元前 1450 年頃から紀元前 1200 年頃に最盛期を迎えた都市国家であるウガリットのウガリット語を記述されるために用いられた文字である。ウガリットは、セム系の民族から構成されていたので、子音中心のアルファベットとして、楔形文字を用いている。音節文字は使われなかった。

エラム文字は、ザグロス山脈の南西部 (イランの南西部の海岸) に棲んでいたエラム人の帝国で、紀元前 2500 年頃から古代ペルシア帝国に滅ぼされる紀元前 330 年頃まで使用されていた楔形文字を借用して作られた文字であり、エラム語楔形文字 (Elamite cuneiform)⁽³⁴⁾と呼ばれている。これは、CV あるいは VC の形で記述された音節文字になっている。全時代で共通で使われたのは、初期 130 種類・後期 130 種類の文字で、それらをあわせても重複を除き全体で 206 種類の文字しかない。時代が経つに従って、表意文字の使用頻度が高くなる。これは、音節文字なので、本稿の最後でもう一度解説する。

古代ペルシア楔形文字⁽³⁵⁾は、最初に解読された文字であるが、完全な表音文字であり、いくつかの音節については、音節文字として表記されるが、それ以外はアルファベット (音

(33) 原図は、<http://www.projectglobalawakening.com/proto-cuneiform-uruk-period/> から、ただし、E. A. Wallis Budge (Ernest Alfred) and L. W. King (Leonard Wooley) in 1922. の書籍からの出典

(34) <https://ja.wikipedia.org/wiki/エラム語楔形文字>, https://en.wikipedia.org/wiki/Elamite_cuneiform

(35) <https://ja.wikipedia.org/wiki/古代ペルシア楔形文字>, https://en.wikipedia.org/wiki/Old_Persian_cuneiform

素文字）になっている。主に碑文の中に同一の内容を他の言語の楔形文字と共に記述されることが多い。例えば、ペルセポリスの碑文は、古代ペルシャ文字とエラム文字、バビロニア時代の楔形文字の3つの楔形文字で記述されている。古代ペルシャでは、古代ペルシャ語を記すために、古代ペルシャ楔形文字を開発した。古代ペルシャ楔形文字では、横棒・縦棒・「く」の字型の3種類の筆画の組み合わせからなる単純な筆画であり、筆画同士の交差はない。なお、古代ペルシャでは、古代ペルシャ語以外は主に公用語の1つのアラム語を使って、アラム文字で記述されている。なお、前述したようにアラム語はセム系の言語なので、アラム文字は、子音を中心とする完全なアルファベットになっている。古代ペルシャ楔形文字についても、音節文字が含まれているので、本稿の最後でもう一度解説する。

5. シュメール期の音節文字の使用例

5.1. 母音と子音の種類

先に述べたように、楔形文字においては、子音+母音の1音節と共に、母音+子音の1音節がある。また、母音は、a, e, i, uの4つである。ただし、シュメール期における母音の種類には、これに加えて /o/, /ε/, /ɔ/ (εはeとaの間の中間の母音、ɔはoの音よりも更に口内を広くとった母音) の音も使われていたとも指摘されている⁽³⁶⁾。

子音の種類は、b, d, g, ġ, h, k, l, m, n, p, q, r, s, š, t, ʔ, u, zである。この中でġと表記されているのは、「入学式」のときの「が」に使われる ng の音で、音声字母では /ŋ/ で表記されるものである。また、š は、日本語でいう「ツ (ʃ)」の音、š は、「シュ (sh / ʃ/)」の音、t は英語の「th /θ/」の音を表わす。また、これ以外に日本語でのヤ行 (j) やワ行 (w) の子音も使われていたのではないかという指摘もある⁽³⁷⁾。

音価の発音について日本語の類似⁽³⁸⁾で言えば、b と m との交換がある (例：i-ba > i-ma), l と r の区別があまりできない (例：gibil /gibir：新しい), m と n との交換がある (例：ezem / ezen：祭り), 母音調和があり、母音調和は2つの子音の間や語尾で良く起こる (例：-ani-ak- > -a-na-, -gu₁₀-ak > -ga) などの特徴がある。

5.2. 音節文字の種類

シュメールの楔形文字の1つの音節文字によってどのような音価が表わされているかについては、ハロラン (John A. Halloran) のシュメール字典 (Sumerian Lexicon) で以下のように分類されている⁽³⁹⁾。

・母音だけを表わすもの V

(36) Eric J. M. Smith. "Harmony and the Vowel Inventory of Sumerian," *Journal of Cuneiform Studies*, volume 57, pp.19-38, 2007.

(37) "Sumerian language", The ETCSL project, Faculty of Oriental Studies, University of Oxford, 2005, <http://etcsl.orinst.ox.ac.uk/edition2/language.php>

(38) 飯島紀, 『古代メソポタミア語文法－シュメール語読本－』, p.45.

(39) <https://www.sumerian.org/sumerlex.htm>

- ・子音+母音を表わすもの CV
- ・母音+子音を表わすもの VC
- ・母音+子音+母音を表わすもの VCV
- ・子音+母音+子音 (+母音) を表わすもの CVC[V]

5.3. 限定詞（決定詞）の使用

シュメール期までは、特に文字によって表わされた内容が、通常の表意文字としての意味であるのか、音節文字として読むのかを識別するために、限定詞（determinative：決定詞とも呼ばれる）のための楔形文字が用意されている。限定詞は、エジプトの聖刻文字でも同じように良く使われている。特に、神名、王名、エンシ（知事：都市の統治者）の名前などを示すための限定詞が碑文などでは良く使われている。以下に、限定詞の例を以下に示す。これは、その後の楔形文字でも踏襲されていく。

楔形文字	文字名	限定詞用法	使用例	読み	意味
𒀭	dingir	神の名前	𒀭𒄀𒂊𒄀𒀭	^d nin-gir ₂ -su	ニンギルス神
𒆸𒀭	id ₂	河川の名前	𒆸𒀭𒄀𒂊𒄀𒀭	id ₂ buranun	ユーフラテス川
𒄀𒀭	uru	町の名前	𒄀𒀭𒄀𒂊𒄀𒀭	uru ^a n-šar ₂ ^{ki}	アッシュール市
𒀭	ki	地名	𒀭𒄀𒂊𒄀𒀭	nun ^{ki}	エリドゥ市

図 18 限定詞の例⁽⁴⁰⁾

5.4. リエゾン・語末の子音の省略

シュメール語の音声的な表現は、現在のフランス語と非常に良く似ており、隣り合う文字の読みにおいてリエゾンが発生することが多い。加えて、フランス語と同じように語末の子音を読まない場合がある。例えば、CV+VC のような形での読みで文字が続く場合に、2重母音になって、母音調和が起り、1つの母音に変化する場合がある。また、各文字が表わしている音節が意味的には途中で切れて分かれるような場合がある。例えば、下図のように表記では “a- ša₃ -ga” と3つの音節文字で記述されている場合は、読み方はその通りになるが、意味としては “a-ša₃g a” というように2つの単語に分かれる。語末の子音の省略については、最後の文字の読みが CVC という形になっている場合、その最後の子音を実際には読まない場合がある。以下に省略される例を記述するが、アッカド期に書かれたシュメール語の文字の読みの綴りを音節文字で表わしていることも影響しているのかも知れない。

(40) 飯島紀, 『古代メソポタミア語文法－シュメール語読本－』, p.185.








楔形文字	綴り	読み	意味
	a-ša ₃ -ga	a-ša ₃ a	～の畑
	šu du ₁₁ -ga	šu dug ₄ a	～の手を触れたところ
	lal	la ₂	量る
	bil	bi ₂	燃やす
	til	ti	生きる
	šag	ša ₃	心
	niĝ ₂	ni ₃	物

 図 19 リエゾン・語末の子音の省略の使用例⁽⁴¹⁾

5.5. シュメール語字典とシュメール期の同音異字

シュメール文字（正確にはアッカド期のシュメール・アッカドの混在文字：Sumero-Akkadian）の楔形文字についての字典あるいは辞典は、インターネットから整備されたものが利用することができる。また、Unicodeにおいても、字形が定義されている。これらの辞典には、いくつかの有名なものがあるが、ペンシルバニア・シュメール語辞典（The Pennsylvania Sumerian Dictionary: PSD）⁽⁴²⁾や、アシュル・チェリー（Ashur Cherry）によるシュメール・アッカド楔形文字音節文字表（Sumero-Akkadian Cuneiform Syllabary Signs List）⁽⁴³⁾が無料で使えるものとなっている。

これらの文字表や、飯島紀のシュメール語の本などに掲載されている文字表を見ても、シュメール語の表記においては、特定の文字を音節文字に割り当てている訳ではなくて、現在の漢字の読みである訓・漢音・呉音のように、1つの文字がいくつもの音で読める多

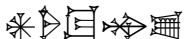
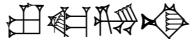
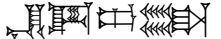

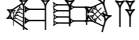
楔形文字	読み	意味
	^d nin-ĝir ₂ -su	ニンギルス神
	uru-ka-gi-na	ウルカギナ王（ラガシュ市他）
	en-a ₂ -kal-le	エンナカルレ王（ウンマ市）
	en-te-me-na	エンテメナ王（ラガシュ市）
	gu ₃ -de ₂ -a	グデア（ラガシュ市のエンシ）

図 20 シュメール期の固有名詞における音節文字の使用例

(41) 飯島紀, 『古代メソポタミア語文法－シュメール語読本－』, p.182, p.223.

(42) <http://psd.museum.upenn.edu>

(43) <https://archive.org/details/AshurCherrySumeroAkkadianCuneiformSyllabarySignsListEnglish>

音性を持つ状況になっている。また、1つの音節についても、いろいろな字が同一の音価を表わす同音異字の状況になっている。これは漢字が導入された飛鳥時代から天平時代まで使われていた萬葉仮名と同じような状況になっている。たとえば、母音のaの音については、14個以上の異種の楔形文字で表現されている。baなどの他の音価についても、10個以上あるのは当たり前になっている。そのため、アッカド期においては、日本において明治政府が平仮名に制限を加え、他の仮名については変体仮名として使わないようにしたのと同様に、1つの音価について、1つの楔形文字で代表させることとした。その詳細は、次の節で述べる。

シュメールの初期王朝の時期までは、その音節を表わすものとして特定の音節文字を固定的に割り当てて使っていないことを示したが、後に編纂されたシュメール語の字典である Syllabary a, b, c⁽⁴⁴⁾ は、それぞれ以下のような内容の3欄もしくは4欄の字典になっており、これらの辞典で音節を表記するために、次の項で挙げるアッシリア期の音節表の音節が用いられている。この字典は、フリードリッヒ・デーリツシュ (Friedrich Delitzsch) が1912年に著した書籍⁽⁴⁵⁾の中に転写されて記述されている。アッシリア期の音節表の音節が用いられていることから、これらの字典が編纂されたのは、アッシリア期であるということがわかる。加えて、これらの字典にはアッシュールバニパル王への賛美も記述されているので、字典を編集させたのはアッシュールバニパル王であることがわかる。

- ・ Syllabary a(S^a) : シュメール語の音節・当該文字・字名の3欄から構成される字音表
- ・ Syllabary b(S^b) : シュメール語の音節・当該文字・アッカド語の音節の3欄から構成される翻訳字典
- ・ Syllabary c(S^c) : シュメール語の音節・当該文字・字名・アッカド語の音節の4欄から構成される翻訳字典

下記に Syllabary a, b の3欄翻訳字典の一部を示す。この字典をラテン文字で翻字して、デジタル化したもの(中期バビロニア時代のもの)が、ORACC(The Open Richly Annotated Cuneiform Corpus) プロジェクト⁽⁴⁶⁾の Digital Corpus of Cuneiform Lexical Texts⁽⁴⁷⁾の一連の資料の中の Syllabary B⁽⁴⁸⁾に収められている。なお、楔形文字で記述された各言語の語彙リスト(字形リスト)の一覧は、Wikipediaの「Lexical lists」⁽⁴⁹⁾にまとめられている。

(44) Syllabary a, b, c の読み方については、杉勇『楔形文字入門』, pp.170-180 を参照

(45) Friedrich Delitzsch, "Assyrische Lesestücke nach den originalen Theils revidirt Theils zum ersten Male hrsg. nebst Paradigmen, Schriftafel, Textanalyse, und kleinem Wörterbuch," London, Hinrichs, 1912, <https://archive.org/details/assyrischeleses00deli/>

(46) <http://oracc.museum.upenn.edu/doc/about/index.html>

(47) <http://oracc.museum.upenn.edu/dcclt/>

(48) <http://oracc.museum.upenn.edu/dcclt/signlists/Q000145>

(49) https://en.wikipedia.org/wiki/Lexical_lists

Syllabary A										Syllabary B									
Col. I.										Col. I.									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80
81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

図 21 Syllabary a, b の 3 欄の翻訳字典の一部⁽⁵⁰⁾

6. アッカド期とアッシリア期（バビロニア期）の以降の音節文字

6.1. 古アッカド期の音節表とアッシリア期の音節表の比較

アッカド朝に入った時期から、特定の音節を特定の文字で表わすという、日本でいうところの仮名文字と同じように、楔形文字の音節文字としての使用法が成立している。よって、固有名詞などの音を表わさなければならない文字については、下記の図に示すような特定の楔形文字を音節文字として利用することになった。ただし、アッカド語や、その後のアッシリア語・バビロニア語は、セム系の子音中心の発音体系を持つ言語であるので、音節文字で表わすよりも、アラム文字やフェニキア文字のように、アブジャド（子音中心の音素文字）で表記した方が正確に音を表現できる。そのため、楔形文字による音節文字としての表記は、日本でいうところの「カタカナ英語」みたいな表記方法になっている。しかしながら、シュメールの音節文字からの借用であるので、当時はこのやり方しかなかったのであろう。また、CVCやVCVのような複合音節を表わす文字を使用しなくなり、CV または VC の音節文字だけが使われている。新アッシリア期や新バビロニア期において、アラム語が公用語になるに従って、より使いやすいアブジャドのアラム文字が流通し、楔形文字を駆逐することになる。

アッシリア期に入ると仮名として利用される楔形文字は、この時期には楔形文字が全体としてかなり簡素化された関係もあり、同じ音節に割り当てられている楔形文字も簡略化されている。以下に掲げる図において、それぞれの音節の楔形文字を見比べてみれば、画数が少なくなっている文字が多いことが見て取れる。

(50) S^aについてはFriedrich Delitzsch, "Assyrische Lesestücke," p.60 より, S^bについてはFriedrich Delitzsch, "Assyrische Lesestücke," p.183 より

Sumero-Accadian Syllabary Table								
	-a	-e	-i	-u	a-	e-	i-	u-
k	𒀭	𒀮	𒀯	𒀰				
g	𒀪	𒀫	𒀬	𒀭	𒀮	𒀯	𒀰	𒀱
q	𒀲	𒀳	𒀴	𒀵				
p	𒀶	𒀷	𒀸	𒀹	𒀺	𒀻	𒀼	𒀽
b	𒀾	𒀿	𒁀	𒁁	𒁂	𒁃	𒁄	𒁅
t	𒁆	𒁇	𒁈	𒁉	𒁊	𒁋	𒁌	𒁍
d	𒁎	𒁏	𒁐	𒁑	𒁒	𒁓	𒁔	𒁕
m	𒁖	𒁗	𒁘	𒁙	𒁚	𒁛	𒁜	𒁝
n	𒁞	𒁟	𒁠	𒁡	𒁢	𒁣	𒁤	𒁥
s	𒁦	𒁧	𒁨	𒁩	𒁪	𒁫	𒁬	𒁭
z	𒁮	𒁯	𒁰	𒁱	𒁲	𒁳	𒁴	𒁵
š	𒁶	𒁷	𒁸	𒁹	𒁺	𒁻	𒁼	𒁽
h	𒁾	𒁿	𒂀	𒂁	𒂂	𒂃	𒂄	𒂅
l	𒂆	𒂇	𒂈	𒂉	𒂊	𒂋	𒂌	𒂍
r	𒂎	𒂏	𒂐	𒂑	𒂒	𒂓	𒂔	𒂕
y	𒂖	𒂗	𒂘	𒂙	𒂚	𒂛	𒂜	𒂝

Assylian Syllabary Table								
	Ca	Ce	Ci	Cu	aC	eC	iC	uC
k	𒀭	𒀮	𒀯	𒀰				
g	𒀪	𒀫	𒀬	𒀭	𒀮	𒀯	𒀰	𒀱
q	𒀲	𒀳	𒀴	𒀵				
p	𒀶	𒀷	𒀸	𒀹	𒀺	𒀻	𒀼	𒀽
b	𒀾	𒀿	𒁀	𒁁	𒁂	𒁃	𒁄	𒁅
t	𒁆	𒁇	𒁈	𒁉	𒁊	𒁋	𒁌	𒁍
d	𒁎	𒁏	𒁐	𒁑	𒁒	𒁓	𒁔	𒁕
m	𒁖	𒁗	𒁘	𒁙	𒁚	𒁛	𒁜	𒁝
n	𒁞	𒁟	𒁠	𒁡	𒁢	𒁣	𒁤	𒁥
s	𒁦	𒁧	𒁨	𒁩	𒁪	𒁫	𒁬	𒁭
z	𒁮	𒁯	𒁰	𒁱	𒁲	𒁳	𒁴	𒁵
š	𒁶	𒁷	𒁸	𒁹	𒁺	𒁻	𒁼	𒁽
h	𒁾	𒁿	𒂀	𒂁	𒂂	𒂃	𒂄	𒂅
l	𒂆	𒂇	𒂈	𒂉	𒂊	𒂋	𒂌	𒂍
r	𒂎	𒂏	𒂐	𒂑	𒂒	𒂓	𒂔	𒂕
y	𒂖	𒂗	𒂘	𒂙	𒂚	𒂛	𒂜	𒂝
	𒂞	𒂟	𒂠	𒂡	𒂢	𒂣	𒂤	𒂥

図22 古アッカド期の音節表とアッシリア期の音節表⁽⁵¹⁾

6.2. アッカド期とアッシリア期における音節文字の使用例

アッカド期に入ると、セム系のアッカド語を直接音節文字として表記する方法が導入される。また、シュメールから継承された表意文字である楔形文字については、現在の日本の漢字のように残っていき、アッカド語の音節文字が、送り仮名のように付けられていく。これは、エジプト聖刻文字やマヤ文字でも同じように、表意文字+表音文字の組み合わせで、送り仮名をつけて、読みやすくするための記法が用いられている。アッカド期以降は、このようにアッカド語による仮名漢字混淆文の形で楔形文字が表記されていくことになるが、アッカドの初期に対して、アッシリア・バビロニアと後期に移行するに従い、表意文字の個数が減っていく。

楔形文字	読み	意味
𒂗𒀭𒂗𒂗𒂗	Šar-ru-gi	サルゴン王 (アッカド)
𒂗𒀭𒂗𒂗𒂗	Šulgi	シュルギ王 (新シュメール)
𒂗𒀭𒂗𒂗𒂗𒂗𒂗𒂗𒂗	Ha-am-mu-ra-bi	ハンムラビ王 (古バビロニア)
𒂗𒀭𒂗𒂗𒂗𒂗𒂗𒂗𒂗𒂗	Tukul-ti-a-é-šár-ra	ティグラト・ピレセル王 (新アッシリア)
𒂗𒀭𒂗𒂗𒂗𒂗𒂗𒂗𒂗𒂗	An-šar ₂ -dù-a	アッシュルバニパル王 (新アッシリア)

図23 古アッカド期・アッシリア期の固有名詞の使用例

(51) 原図は、https://en.wikipedia.org/wiki/Cuneiform#/media/File:Sumero-Akkadian_cuneiform_syllabary.jpg および https://en.wikipedia.org/wiki/Cuneiform#/media/File:Akkadian_syllabary.svg

6.3. エラム文字と古代ペルシャ文字における楔形音節文字

先に述べたようにザクロス山脈の麓の地においては、エラム人が居住していたが、エラム人の文字も、原エラム文字および楔形文字を踏襲したエラム文字は、共に、メソポタミアと密接に関わりを持っている。紀元前 2500 年頃から楔形文字としてエラム語を記述されたエラム文字については、初期はアッカド期の楔形文字を借用した形で音節文字が使われている。また、紀元前 1000 年頃から、後期エラム文字が出て、アッシリア文字と同様により簡略された形になっている。初期エラム文字も 130 種類、後期エラム文字も 130 種類ぐらいの文字が使われている。アッカド語楔形文字の CVC 形も時折使われたが、母音はしばしば無視され子音の音価のみを表した。決定詞（限定符）もまた用いられた⁽⁵²⁾。以下に後期エラム文字の音節表を示す。アッシリア文字と共通している音価もある。エラム文字については、インドのザクロス山脈の東側に棲んでいたドラヴィダ語族のブラーフーイー文字との関連が指摘されている⁽⁵³⁾。この繋がりを示すための仮説としてエラモ＝ドラヴィダ言語系（Elamo-Dravidian language family）が提唱されている^{(54), (55)}。なお、ペルセポリスの碑文に書かれていた 3 種類の文字は、1 番目の文字は古代ペルシャ文字で、2 番目の文字はエラム文字、そして、3 番目の文字はアッシリア文字であった。

	Ca	Ce	Ci	Cu	aC	eC	iC	uC
p b	𐎶 pa 𐎵 ba	𐎶 be	𐎶 pe - pi	𐎶 pu	𐎶 ap	𐎶 ip (𐎶 ip)		𐎶 up
k g	𐎶 ka, 𐎶 ga	𐎶 ke - ki 𐎶 ge - gi		𐎶 ku	𐎶 ak	𐎶 ik		𐎶 uk
t d	𐎶 da	𐎶 te	𐎶 ti	𐎶 tu, 𐎶 tu ₁ 𐎶 du	𐎶 at			𐎶 ut
š	𐎶 ša (𐎶 ša)	𐎶 še	𐎶 ši	𐎶 šu	𐎶 aš		𐎶 iš ~ uš	
s z (š)	𐎶 sa 𐎶 za	𐎶 se ~ si 𐎶 ze ~ zi		𐎶 su	𐎶 as/ac	𐎶 is/ic		
y	𐎶 ya							
l	𐎶 la	𐎶 le - li		𐎶 lu				𐎶 ul
m	𐎶 ma	𐎶 me	𐎶 mi	𐎶 mu	𐎶 am			𐎶 um
n	𐎶 na	𐎶 ne - ni		𐎶 nu	𐎶 an	𐎶 en	𐎶 in	𐎶 un
r	𐎶 ra	𐎶 re - ri		𐎶 ru		𐎶 ir		𐎶 ur
h o	𐎶 ha 𐎶 a	𐎶 he 𐎶 e	𐎶 hi 𐎶 i	𐎶 hu 𐎶 u, 𐎶 ú	𐎶 ah			

図 24 エラム文字の音節表と使用例⁽⁵⁶⁾

(52) <https://ja.wikipedia.org/wiki/エラム語楔形文字>, https://en.wikipedia.org/wiki/Elamite_cuneiform

(53) David McAlpin, "Linguistic prehistory: the Dravidian situation," in Madhav M. Deshpande and Peter Edwin Hook: "Aryan and Non-Aryan in India," pp.175-189, 1979.

(54) David McAlpin, "Toward Proto-Elamo-Dravidian," Language vol. 50 no. 1, pp.89-101, 1974.

(55) https://en.wikipedia.org/wiki/Elamo-Dravidian_languages

(56) 原図は、https://en.wikipedia.org/wiki/Elamite_cuneiform から、使用例はエラム王のシュトルク・ナフンテ（Šutruk-Nakhunte）が奪ったナラム・シンの勝利の碑（Victory Stele of Naram-Sin）の右上にエラム楔形文字で書かれた碑文 https://en.wikipedia.org/wiki/Elamite_cuneiform#/media/File:Naram-Sin_stele_inscription_in_Elamite.jpg

新バビロニアを滅ぼしたアケメネス朝ペルシャでは、アラム語の影響から完全な音素文字（アルファベット）で、古代ペルシャ語を表記している。しかし、一部の文字については音節文字になっている。なお、母音についてはセム系の言語に共通しているが、a, i, u の3つの音価しかない。ただし、実際にはこの3つの母音の長音、a音からの2重母音の組み合わせなどがあったとされているが、表記はされていない。また、語頭のa音以外のa音は省略されるので、子音だけなのか母音のaが間に挟まるのかは曖昧になっている。子音は22音ある。いくつかの種類の音節について、1つの音節文字で表現するのは、アッシリア楔形文字からの影響があったのかも知れない。

	—a	—i	—u
k	𐎧	𐎦	𐎥
x	𐎧		𐎥
g	𐎧		𐎥
g	𐎧		𐎥
j	𐎧	𐎦	
t	𐎧	𐎦	𐎥
θ	𐎧		𐎥
d	𐎧	𐎦	𐎥
p	𐎧		𐎥
f	𐎧		𐎥
h	𐎧		𐎥
m	𐎧	𐎦	𐎥
n	𐎧		𐎥
s	𐎧		𐎥
z	𐎧		𐎥
v	𐎧	𐎦	
š	𐎧		𐎥
h	𐎧		𐎥
l	𐎧		𐎥
r	𐎧		𐎥
y	𐎧		𐎥




図 25 古代ペルシャ文字の音素・音節表と使用例⁽⁵⁷⁾

7. おわりに

楔形文字は、象形文字に始まり、表意文字を経て、最終的には音節を表わす表音文字に収束していく。また、南メソポタミアに隣接している民族には、特に西側のシリア方面は、セム系の言語を話す民族があったので、最終的には音素文字であるアラム文字によって駆逐されてしまう。しかしながら、その途中では、最初のシュメール王朝のシュメール語が

(57) https://en.wikipedia.org/wiki/Cuneiform#/media/File:Old_Persian_cuneiform.jpg および使用例はダリウス王の碑文から、https://en.wikipedia.org/wiki/Cuneiform#/media/File:Tomb_of_Darius_I_DNa_inscription_part_II.jpg

音節文字として音を表記していたことが後世にも影響されて、子音中心の言語の話者であるセム系の民族が建てた王朝のアッカドやアッシリア、あるいはバビロニアにおいても、それぞれの言語を表音文字として表記する際に音節文字を使う方法が踏襲されている。後世の時代においても、シュメール語とシュメール期の楔形文字は、現在における漢字のように当時の支配者階級においても古典として学ばれている。また日本語における漢字と仮名の関係のように、表意文字と音節文字の混淆文が使われて続いていた。アッシュールバニパル王の例は顕著であるが、連綿と古典を学ぶ文化が支配者階級に存在していたことは、メソポタミアの3000年における長い歴史の中でシュメールの文化が継承されていたことを意味する。そのような意味においてメソポタミア文明において、初期のシュメールが果たした役割は、非常に重要であったことが窺える。

また、メソポタミアの東側に隣接しているザグロス山脈近辺のエラム人においては、楔形文字の音節文字を踏襲した独自のエラム文字が使われ、アフガニスタン付近のミタンニ（フルリ）人においても、楔形文字をそのまま利用している。これがインドの文字にも影響しているという研究もある。

この一連の研究ノートにおいては、断片的な音節文字の系譜（Fragmented genealogies of syllabaries）ということで連載を始めているが、シュメールの楔形文字からインドのアブギダと分類される一連の文字群には、以上のような繋がりを感じさせる。特に東西アジア全体で、孤立的に存在する音節文字には、埋もれている継承があるのではないかという問題意識がこの連載を始めた理由になっている。音節文字の埋もれた継承を洗い出すことによって、西の果てにあるシュメールから東の果てにある日本まで、音節文字としての統一的な系譜が導き出される可能性がある。文字以外にも、5世紀のササン朝ペルシャの文様が奈良時代には日本に伝わり、そのような文物が、実際に正倉院に納められていることを鑑みても、古代の東西アジアの交流について、文字の側面から考察することは興味深い。

（2020.9.30 受稿，2020.11.16 受理）

〔抄 録〕

音節文字の系譜というシリーズでの研究ノートにおいて、第1回目の概説に引き続き、楔形文字における音節文字の形成について解説する。初期のシュメール王朝において、音価を表わす表音文字として、音節文字が導入されたが、それは固定された文字で表わすのではなく、漢字の音を借りた萬葉仮名のように、楔形文字の一部の音を充てて、固有名詞の音節を表わす方法が導入された。現在の平仮名のように、特定の楔形文字を固定して、特定の音節を表わすようになったのは、セム系の子音中心の言語を持つアッカド王朝においてからであり、それに続くアッシリア・バビロニアにおいても、その方式が踏襲されていく。初期のシュメールにおいて、音価を表わす基本単位として音節を用いた関係から、続く王朝においても、本来セム系の言語ではアブジャドを用いるべきであるが、音節で音価を表わす方式が使われている。最終的には、セム系のアラム語が公用語になり、アブジャドのアラム文字が楔形文字を駆逐していくが、周辺のエラム文字などに音価を音節単位で表記する方法が残り、次のインド系の文字へ受け継がれていく。